

# 旅

には、意外と本質的な問題である。というのも、旅に持って行く荷物とは、自分が抱えている煩惱そのものような気がしてならないからである。

実のところ、お金とパスポートなど最低限のものを除けば、旅に本当に必要なものはそんなにない。こまめに洗濯するならば着替えだって1組あれば十分である。実際、好きな文庫本と手拭いと竹の耳掻きくらいで旅ができたなら、どんなにいいだろうかと思う。

けれども、現実には、写真も撮りたい、本やガイドブックも欲しい、ビデオも撮りたい、

さらにパソコンを使って旅先からライブ旅行記を発信したいなど多くの欲求があり、その欲求に従って荷物も増えてゆく。もちろん、旅にはさまざまなスタイルがあるし、それはそれでかまわない。けれども、荷物によって自分の旅のスタイルや、旅にまつわる想像力が知らぬ間に規定されていることも少なくない。

初めてアフリカに足を踏み入れたとき、未経験ということもあって、旅の装備にはとても気を使った。マラリア予防薬や防虫ネット、軍用の

ガソリン・コンロ、スイス製の十徳ナイフ、NASAが開発したという非常防寒シートなどサバイバル用品の数々を携えて行った。自分の中では、それらの道具で困難を乗り越えて行くヒロイックな自分の姿がイメージされていたのだ。

25

## 旅の曲者

### パンツと福の神

文・写真／田中真知

イラスト／bozen

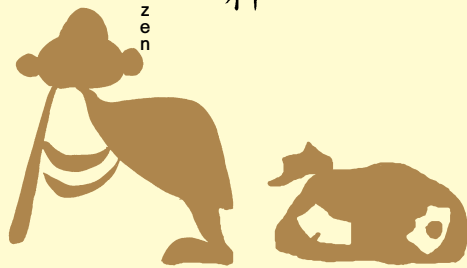
もらった。

そこには現地の若者が毎日通ってきて洗濯や掃除や料理などの仕事をしていた。ほくもシャツや下着などの洗濯を彼に頼んでいた。

ところが、ある日、乾いた洗濯物が戻ってきたときに、パンツが1枚足りないのに気づいた。1年近い旅に備えて日本で4枚1000円とかで買ったパンツである。その大切なパンツが1枚、見当たらない。若者に訊いても、自分は知らないと言う。人類学者の方に訊くと「たぶん若者

が盗んだのだろう、一応言っておくけど、まず出てこないだろうな」と言われた。

それを聞いたとたん、目の前が真っ暗になった。何ということだ。4枚あったパンツが、3枚になってしまった。3枚のパンツで1年にも及ぶ旅を続けるなんてむりだ。もうだめだ。じっくり計画を練って、準備してきた旅なのに、始まったとたん



に、もう終わりだ。

今こう書いていてもバカバカしくなってくるのだが、そのときは真剣だった。ほくは帰国を考えた。今風に言えば、旅をリセットしようと考えたのだ。日本に戻って、新しくパンツを、それも4枚1000円やつを緊急時に備えて2組買って来よう。しかし、それではお金がかかり過ぎる。それよりも、友人に頼んで

パンツを送ってもらう方がいいかもしれない。

いずれにしても、パンツ3枚では、もう旅どころではない。4ひく1は3、ああ、せめて5ひく1で4だったら、どんなによかっただろう。熱射病のせいで頭が変になっていたのかもしれないが、そんなことを朝から晩まで考えていた。

それでも前向きに考えようとして、村の市場に行ってみた。ひよつとして、代わりになるパンツが売っているかもしれない。ところが、あるのはひものついた白いデカパンばかり。こんなものを履いて旅ができるはずがない。どうあっても、パンツを送ってもらわなくてはだめだ。そんな強迫観念にとらわれて、手紙の下書きを始めた。ところが、書きはじめた文章を読みかえすと、明らかに変である。結局、手紙を書くのは途中でやめた。

そんなとき、持参していた中島敦の文庫本の中で「狼疾」という言葉が目にとまった。「狼疾」とは、「孟子」に出てくる言葉で、指一本が惜しいばかりに、肩や背まで失うことに気がつかないことだという。そうか、狼疾なのか。自分の失われたパンツへの異様なまでのこだわりは、かの中島敦の悩みと通ずるものであったのかと思うと、あの一時の



スーダン南部の某村の子供たち。激化した内戦のために、今ではこの村はなくなってしまった。

熱に浮かされたような強迫観念が急速に冷え込んでいった。  
たかがパンツ1枚ではないか。そんな至極当たり前のことに気づくの

に、数日かかった。ふと、まわりを見回すと、ほくのパンツを盗んだ疑いのある若者も含めて、この家に入りする少年や青年の多くは、内戦

で家族や親戚を失った者たちばかりだった。町を歩けば、戦闘や地雷のせいで腕や足を失った者たちとたくさんすれ違った。ひどく恥ずかしい話だが、そのときになって、ほくは自分がどこにいるのか、どんな大地に足を下ろしているのか初めて気がついた。

逆にこのときパンツを失わなかったら、ほくは何も気づくことも見ることもないまま、この地をあとにしていたのかもしれない。そう思うと、ぞっとした。

その後、旅を続けるさなか、ほくはカメラを盗まれ、手帳や、お金やトラベラーズチェックも盗まれた。それはショックではあったものの、スーダンでパンツがなくなったときに比べれば、それほど大きな痛手とは感じなかった。荷物が失われたからと言って、自分の旅が失われるわけではないと、わかっていたからだ。旅を続けて、ほくはインドへとたどりつき、デリーの宿で、ある日本人旅行者と出会った。驚いたことに、彼はおなかに巻いているパスポート



## 田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語」(北東部編・中南部編、凱風社)「ある夜、ピラミッドで」(旅行人)、訳書に「グラハム・ハンコック 神の刻印」(凱風社)、「惑星の暗号」(翔泳社)など。

とお金以外、荷物を全く持っていなかった。訊けば、2週間ほど前にバックパックごと、すべての荷物を盗まれたのだという。ところが、彼はさばさばした顔で「荷物がないと、旅が本当に楽ですよ。最初はショックでしたけど、盗まれてからの方が旅が楽しくなりました」と言い、まだ、しばらくこのままのスタイルで旅を続けるつもりだと言った。

彼の話を聞きながら、昔読んだ星新一のショートショートを思い出した。たしか「福の神」という題名の話だった。そこに出てくる福の神は大きな袋を背負っているのだが、その袋には福が入っているのではない。福の神は、人間のところにやってくる、その人の煩惱をつまみ出して、それをぽいと袋に入れる。すると、自ずとその人の元に福が訪れるというのだ。

だとすれば、福の神の袋の中には、ほくのパンツやら、カメラやら、あるいはデリーで会った旅行者のバックパックなどもきつと入っているのかもしれない。